二〇一八年度 早稲田大学大学院教育学研究科
博士後期課程 一般・外国学生入学試験問題 〔資料解読〕
【教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）】

解答上の注意

一．教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）の入学試験問題は、出願時に届け出た指導教員の欄に従い、左記の表の解答すべき問題を解答しなさい。

志願票に記入した研究指導名	志願票に記入した指導希望教員名		解答すべき問題・ページ	必要な解答用紙枚数
国語科教育学研究指導	幸田 国広	一	国語教育（P．2〜3）	二枚
国語科教育学研究指導	町田 守弘			
国語科内容学研究指導	松木 正恵	二	日本語学（含日本語教育）（P．4〜6）	一枚
国語科内容学研究指導	松本 直樹	三	古典文学 Ⅰ 上代文学（P．7）	一枚
国語科内容学研究指導	新美 哲彦			
国語科内容学研究指導	福家 俊幸	四	古典文学 Ⅱ 中古文学（P．8）	一枚
国語科内容学研究指導	大津 雄一			
国語科内容学研究指導	田渕 句美子	五	古典文学 Ⅲ 中世文学（P．9〜10）	一枚
国語科内容学研究指導	中嶋 隆	六	古典文学 Ⅳ 近世文学（P．11〜12）	一枚
国語科内容学研究指導	内山 精也			
国語科内容学研究指導	堀 誠	七	中国古典文学（P．13〜14）	二枚
国語科内容学研究指導	石原 千秋			
国語科内容学研究指導	金井 景子	八	近代文学（P．15〜16）	二枚
国語科内容学研究指導	和田 敦彦			

二．解答用紙の所定欄に受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名を必ず記入すること。

三．解答の際には、問題番号、設問番号を記入してから解答すること。（例「問題一-問二」等）

四．解答すべき問題以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

五．問題用紙は「十六枚」（本ページ含む）です。

六．解答用紙は二枚配布しているが、使用する解答用紙は一と七と八が「二枚」で、それ以外は「一枚」です。

以上

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

一　国語教育

問題一　次の文章は、西尾実「文学教育とそのあゆみ」の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

いまの文學教育は、かつてのそれのように、文學だけを國語教育の全領域としてもいなければ、それを絶對的なものにもしていない。また、その方法においても、文學研究を唯一の方向とはしていない。その點で、文學教育としての解放がおこなわれ、發展が可能にされてきている。

戰後の教室において、小學校では、たとえばひとつの「お話」を讀み終ると、それを紙芝居にしたり、シナリオにしたり、脚色して上演したりする、演出的な活動がさかんにおこなわれていた。また、詩や歌を讀んでは、詩や歌を作り、「お話」を讀んでは、繪をかき、指人形をつくるというような、創作的な活動もさかんに試みられていた。中學校では、ひとつの詩を讀んで、それについての感想を中心とした討議がおこなわれ、高等學校では、たとえば島崎藤村の「破戒」を讀んで後は、「藤村の日本文學史における位置」というような問題が報告されたり、討議されたりするというふうだった。こういう教室を見學して、學習の實際に觸れてみると、そこには、いろいろ無理もあれば、まちがいとおもわれることもあった。にもかかわらず、先生も生徒も、それに本氣になり、力を傾けてあやしまないばかりか、新しい張りあいをさえ見出しているらしかった。それらの方法を一般化していうと、文學鑑賞に媒介された演出であり、創作であり、また研究であって、そのどれもが、まだ正しい位置づけを得ていないための不安定が認められ、ほんとうの學習效果をあげ得ていないと思われる場合が少くなかった。けれども、その半面において、文學活動の經驗が學習の基盤であるという、革新的方向の開拓が、そこにおこなわれていたことはたしかである。

このような、文學鑑賞の經驗を基礎とした學習の發展は、最近にいたり、さらに、鑑賞によって喚起された問題意識の指導をとりあげるにいたった。しかも、この、文學作品の鑑賞によって喚起された問題意識の指導こそ、もつとも一般的な、文學活動の經驗による文學教育の任務であるといってよい。

文學に限らず、藝術作品が、鑑賞者に與える、もっとも一般的な機能は、鑑賞者その人に、生活に關する問題意識を喚起することである。戰後における國民生活の窮乏のなかにおかれている高校生が、たまたま萬葉集における憶良の「貧窮問答歌」を學習して、ある社會問題の調査に立ちあがろうとしたり、イプセンの「人形の家」を學習して、家庭裁判の任務に結びつけるというような、一見、他からみると、いかにも突飛な思いつきのように考えられる場合もあるが、それらは特殊な例で、一般には、近親や親友を失った少年が、ある小說を讀んで、その深い悲しみが慰められたり、スランプに陷っている青年が、誰かの詩を讀んで生きる勇氣を鼓舞されたり、問題に惱んでいる人間が、ある脚本を讀み、またはある劇を見て、問題解決の曙光を見出すというような事例は少くない。たとえ、それほどでなくとも、文學作品の鑑賞が讀者にもたらす、生の慰撫・激勵は少くない。文學の讀者は、鑑賞によって與えられる何らかの、個人的な慰撫や激勵を期待しているといっても過言ではない。このような、文學機能が讀者にもたらす、それぞれの主體的影響こそ、文學鑑賞の意味であり、したがって、このような、鑑賞による主體的成果を眞實なものに導くことが、文學教育の、もっとも基本的な、もっとも一般的な意義である。

（『文学教育』東京大学出版会、一九五五、二～五頁）

問1　西尾は、戦前からの文学教育の発展をどのように捉えているか。この文章が発表された当時の国語教育思潮と関連付けて説明せよ。

問2　傍線部の授業実践の例示は、誰のどのような実践報告に基づいているか。詳しく説明せよ。

問3　西尾はこの当時、文学教育の位置付けをめぐって、ある国語学者と論争を行っている。その国語学者とは誰のことか。また、その論争はどのようなものか、両者の対立点を明確にして説明せよ。

《注意》解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。解答用紙の「問題番号」欄に「問題一」、「問題二」とそれぞれ記入した上で、「問題一」は問1～3、「問題二」は問1・問2とそれぞれ記入してから、続けて解答を記入してください。解答用紙は裏面も使用可です。

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

問題二　次の文章は、「大学入学共通テスト　実施方針」の一部（A）と、その記述式問題例に対する河合塾の批評（B）である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

（A）

6．記述式問題の実施方法等

（1）国語

①出題の範囲

記述式問題の出題範囲は、「国語総合」（古文・漢文を除く。）の内容とする。

②評価すべき能力・問題類型等

多様な文章や図表などをもとに、複数の情報を統合し構造化して考えをまとめたり、その過程や結果について、相手が正確に理解できるよう根拠に基づいて論述したりする思考力・判断力・表現力を評価する。設問において一定の条件を設定し、それを踏まえ結論や結論に至るプロセス等を解答させる条件付記述式とし、特に「論理（情報と情報の関係性）の吟味・構築」や「情報を編集して文章にまとめること」に関わる能力の評価を重視する。

③出題・採点方法

○記述式問題の作問、出題、採点はセンターにおいて行う。

以下、略

www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1388193_5.pdf

（B）

問題作成においては、設問はシンプルであるべきであり、下手に条件を付すことで、生徒の思考力がスムーズに発揮できなくなるのであれば、その問題は見直す必要があろう。また、問題のレベルは、現状、言葉の字面だけを追いかけるだけの表面的な読解力さえあれば容易に正答できる問題であり、それで上位・中位・下位の学力差を弁別できるとも思えない。また、文書から得た「情報」をそのまま使うことで正答できるという点でも表現力を測る記述問題としては物足りなさが残る。

もう一つ、今回公表された問題例で特徴的なのは、素材文がいずれも比較的平易に読める「文書」や「会話文」、契約書など実用的な文書がもとになっている点である。今回公表された資料の中でも、素材選定の「工夫」の例として、「新聞記事・社説」「契約書や法令の条文」「取扱説明書」といった「実務的な文章」が挙がっているが、これから大学に進学する者たちにとって、あえてこれらの平易な文書を課す必然性がどこにあるのだろう。

「大学入学共通テスト（仮称）」は、日本語を母語として育った（であろう）生徒を対象とする試験である。であるならば、彼らには、現行のセンター試験の「国語」のような評論や小説といった良質の文章を素材にし、文章全体の主旨や論旨展開、筆者の主張を読み取ることのできる高度な読解力を求めるべきである。もちろん、記述式以外の客観式の問題でそういった文章を使用するのかもしれないが、記述式と客観式とで素材の質的な差が大きくなる。これを「国語」という教科の下に一括りにできるのか懸念される。

本テストは日常的に日本語で言語活動を行ってきた生徒を対象とするのだから、日常目にする新聞記事や会話文程度でよしとするのではなく、彼らが大学入学後に触れる各種の専門書や文献を読み解くだけの読解力を求めることが、「高大接続」を実現する上でも必要不可欠といえるのではなかろうか。まさか読みやすい文書や資料、図版を与えれば、人はより深く考えて表現するようになるというわけではあるまい。高いレベルでの表現力を習得するためにも、まずは文章を深く読み解くことが大事なのである。

http://www.hapira1.co.jp/rd/rd-05.html#a1

問1　「実施方針」にある記述式問題のねらいをよく読んだ上で、右の河合塾の批評についてのあなたの考えを述べなさい。

問2　こうした記述式問題が登場する背景には、どのような日本の教育の現状とこれからの教育政策のビジョンがあるのか。知るところを説明せよ。

《注意》解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。解答用紙の「問題番号」欄に「問題一」、「問題二」とそれぞれ記入した上で、「問題一」は問1～3、「問題二」は問1・問2とそれぞれ記入してから、続けて解答を記入してください。解答用紙は裏面も使用可です。

二〇一八年度
早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

二　日本語学（含日本語教育）

問題　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（1～6の順に上下に読み進めること。）

廣日本文典

1

總論

人ノ聲音ノ、意義アルモノヲ、言語トイフ。人ハ、言語ニ由リテ、其思想ヲ述ブ。言語ヲ述ブルニ、法則アリ、人々、其法則ニ由リテ、相語リテ、互ニ能ク其思想ヲ通ズ。

言語ヲ、物ニ書キツクル標ヲ、字、又ハ、文字トイヒ、書キツラヌタルモノヲ、文、又ハ、文章トイフ。言語ニ法則アルガ故ニ、文章ニモ法則アリ、其法則ヲ、文法トイヒ、文法ヲ記シタル書ヲ、文典トイフ。

日本ノ言語ハ、古ヘヨリ、年代ヲ歴ルニ隨ヒテ、屢變遷シキ。然レドモ、今、常ニ文章ニ用ヰルハ、今ヨリ八九百年前ノ言語ナリ。

此ノ故ニ、文法モ、其年代ノ言語ノ法則ニ據ル。

世界ノ各國ニ、各、言語アリテ、相異ナリ、コレヲ、其國ノ國語トイフ。サレバ、各國ノ文法モ、隨ヒテ相異ナリ。此ノ書ハ、日本國語ノ文法ヲ記シタルモノナレバ、日本文典ト名ヅク。書中ヲ別ナテ、三篇トス、文字篇ト、單語篇ト、文章篇トナリ。

〈中略〉

單語篇

言語ハ、一音、又ハ、數音ニテ成ル。「をり〳〵に、あそぶ、いとま、は、ある、ひと、の、いとま、なし、とて、ふみ、よま、ぬ、かな。」トイフ歌ノ中ニテ、右ノ方ニ點ヲ付ケタルガ如ク個々ニ別ツヰハ十四トナル。斯ク分ナタル一ツヲ、單語トイフ。單語篇ハ、其單語ノ種類用法、等ヲ講ズ。

○八品詞。單語ノ種類ハ、名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接續詞、感動詞ノ八品ニ分ル。

をり〳〵に、遊ぶ、暇は、ある、人の、暇無し、とて、書、讀まぬ、かな。（鈴屋集）

見て、も、又、復、も、見まく、の、欲しかり、し、花、の、盛、は、過ぎ、や、し、ぬ、らむ（新古今十六）

右ノ中ニテ、「暇」、「人」、「書」、「花」、「盛」、「過ぎ」、等ハ事物ノ名ナイフ語ナレバ、名詞トイフ。「遊ぶ」、「ある」、「讀ま」、「見」、「爲」、（「末」ノ）等ハ、事物ノ動作作用ヲイフ語ナレバ、動詞トイフ。「無し」、「欲し」、等ハ、事物ノ形狀情意ヲイフ語ナレバ、形容詞トイフ。「ぬ」、「て」、「まく」、「ぬ」、（「末」ノ）「らむ」、等ハ、動詞ノ意ヲ助クル語ナレバ、助動詞トイフ。「をり〳〵に」、「復」ハ、動詞ニ副フ語ナレバ、副詞トイフ。「は」、「の」、「て」、「も」、「や」ハ、他ノ語ト語トノ關係ヲ示スモノニテ、「豆爾乎波」トイフ。「かな」ハ、感情ヲイフ語ニテ、感動詞トイフ。「又」ハ、「見ても」ト、「復も見まく」ト、ノ二句ヲ接ギ合ハスル語ニテ、接續詞トイフ。

以上八品ノ單語ノ中ニテ、動詞ノ「遊ぶ」、「ある」、ナドハ、其語ノ末、「あそび」、「あそべ」、「あり」、「あれ」、ナドト變ハリ、形容詞ノ「無し」ハ、「なき」、「なく」、ナド變ハリ、助動詞ノ「ぬ」ハ、「ず」、「ね」、ナド變ハルヿアリ。其他ノ五品ノ單語ハ、其形ノ變ハルヿナシ。各單語ノ、各自ノ性質、用法等ハ、次ニ、委シク述ブベシ。

○凡ソ、アリトアル單語ハ、皆、八品詞ノ中ニ分屬ス、但シ、此ノ外ニ、接頭語、接尾語、ナドイフモノアリ、ソハ、篇末ニ說カム。

〈中略〉

2

文章篇

言語ヲ書ニ筆シテ、其思想ノ完結シタルヲ、「文」、又ハ、「文章」トイヒ、未ダ完結セザルヲ、「句」トイフ。

文章篇ハ、個々ノ單語ノ相關係スルヨリ起ル法則、及ビ、其法則ニ據リテ、文、又ハ、句ヲ構成スル法則ヲ講ズ、從來、コレヲ、「てにをはのかけあひ」トモイフ。

主語　說明語

主語、說明語。人ノ思想ノ上ニ、先ヅ、主トシテ浮ブ事物アリテ、次ニ、コレニ伴フハ、其事物ノ動作、作用、形狀、性質、等ナリ。「花、咲く。」「志、堅し。」ナドイフニ、「花」、又ハ、「志」ハ、先ヅ、心ニ浮ブ事物ニテ、次ニ、「咲く」、（或ハ、「落つ」ナドイヒテ、「花」ノ作用ヲ述ベ、又ハ、「堅し」、（或ハ、「薄し」）ナドイヒテ、「志」ノ性質ヲ述ブ。「花」、又「志」、ハ、其作用ヲ起シ、又ハ、其性質ヲ呈スル主タル語ナレバ、主語（又ハ文主）ト稱シ、「咲く」、又ハ、「堅し」ハ、其ノ主ノ作用、性質、ヲ說明スル語ナレバ、說明語ト稱ス。

主語　花、　說明語　咲く。　主語　志、　說明語　堅し。

主語、上ニ居リ、說明語、下ニ居ルヲ、正則トス。主語ト說明語トヲ具シタルハ、文ナリ、文ニハ、必ズ、主語ト說明語トアルヲ要ス。

主語ト說明語トヲ具シタルハ、各、一語ニテモ、文ナリ、長短ニ關セズ。

○源平盛衰記、三十七、熊谷ハ、西ノ城戸口、濠際ニ控ヘテ、誰カハ、先ヲバ蒐クベキ、ハヤ城戸口ヲ開ケカシ、トゾ相待チケル、後ノ方ニ、馬ノ足音、人影ノスルヤウニ覺エケレバ、雲透シニ、之ヲ見ルニ、武者二騎、馳セ來レリ、近ヅクヲ見レバ、平山ナリ、案ニ違ハズ、ト思ヒテ、如何ニ、平山殿カ、（問）季重、（答）問フハ誰ゾ、熊谷殿カ、（問）直實、（答）ト名乘リ合ヒ、共ニ、一所ニ寄リ合ヒタリ。」斯ル問答ノ語ノ如キ、一思想ヲ述ベテ、完結シタルガ如クナレバ、說明語ナクトモ、文ト見做サルベキガ如シ、然レモ、尙、「平山殿ナルカ、季重ナリ、問フハ誰ナルゾ、熊谷殿ナルカ、直實ナリ、」ソ略ナリ、（なり）ハ、說明語ナリ。）

其他、「あゝ、ト歎ジ、「なう」ト呼ビ、「をう」ト應ヘ、「ゆけ」ト命ジ、「玄かり」ト肯ヒ、「いな」ト否ミ、「月よ」、「花よ」、ト呼ブ、ナド、一二ノ單語ニテ、一思想ヲ述ベテ、完結シタルガ如クナレド、尙、餘意ハ省略セラレテアルナリ。

客語

A

客語。說明語ノ、「有對自動詞」、又ハ、「單對他動詞」、「複對他動詞」ナルトキハ、各、其標準ノ語、又ハ、目的ノ語ヲ、客語トイフ。客語ハ、主語ト說明語トノ間ニ居ルヲ、正則トス。

二〇一八年度
早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題
科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

○有對自動、單對他動、複對他動、及ビ、標準、目的等ノ事、第一一七、第一一八節ニ說ケリ。

水は、低きに就く。（主語 客語 說明語）　火は、物を乾かす。（主語 客語 說明語）

風は、波を岸に寄す。（主語 客語 說明語）

○左ノ如キハ、二ツノ名詞、共ニ主語ナレド、下ナルヲ、姑ク、客語トモ見、或ハ、「なり、たり」ト合ハセテ、說明語トモ見ル。

水は、流動物なり。（主語 客語 說明語）　正成は、忠臣なり。（主語 客語 說明語）

鈴屋の翁は、宣長なり。（主語 說明語）　君、君たり。臣、臣たり。（主語 說明語）

修飾語　主部　客部　說明部

修飾語。主部。客部。說明部。主語ニ、他語ヲ添ヘテ、其意義ヲ、種々ニ修飾スルコトアリ。客語、說明語、ニ於ケルモ、然リ。其語ヲ、修飾語トイフ。修飾語ハ、其添フベキ語ノ上ニ居ルヲ、正則トス。主語ト、其修飾語トヲ合セテ、主部トシ、客語ト、其修飾語トヲ合セテ、客部トシ、說明語ト、其修飾語トヲ合セテ、說明部トス。此ノ三部、多クハ、各、句ヲ成シ、部ノ長キモノハ、更ニ、數句ニ分ル。

梅の花、早く咲く。（修飾語 主語 主部—句 修飾語 說明語 說明部—句）

燃りなる火は、濡れたる物を、忽に乾かす。（修飾語 主語 主部—句 修飾語 客語 客部—句 修飾語 說明語 說明部—句）

勉ひる志、愈、堅し。（修飾語 主語 主部—句 修飾語 說明語 說明部—句）

○以下、主語、客語、說明語、修飾語、ヲ略シテ、「主」、「客」、「說」、「修」、ト記ス。

○修飾語ハ、幾語ヲモ重ヌ。

我が園の梅の花、雪の中に、逸早く、咲き出でぬ。（修 修 主 修 修 修 說 主部—句 說—句 說—句 說—明—部）

○呼掛ニ用ヰル名詞モ、主語ニテ、命令、禁止、ノ語モ、說明語ナリ。（命令、禁止、ノ主語ハ、多クハ、呼掛ノ名詞ナリ、第五二六節ヲ參見セヨ。）

皆人は、花の衣に、なりぬなり、苦の袂よ、乾きだに、せよ。（主 客 說 主 客 說 說）

今更に、山へ歸るな、時鳥、聲の限りは、我が宿に、鳴け。（修 客 說 主 修 說 說—明—部 說—明—部）

○主語客語、說明語、無クトモ、意ノ、分明ニ解セラルベキハ、省カル、コアリ、左ノ如シ。（括弧ノ内ナル語ハ、補塡セルナリ、）

かくて、（我等）、宇多の松原を、行き過ぐ。その松の數、幾そばく（アラム）、幾千年（を）歷たり、と（イフコヲ）（我等）知らず。（土佐日記）（修 主 客 說 主 修 說 客 主 說—明—部 說—明—部 說 說—明—部）

尙、後ノ畧語、畧句、ノ條（第五六四節以下）ニ委シク說クベシ。

○接續詞ノ、全句、全文、ヲ接續スルモノハ、主部、客部、說明部、ノ外ニ立ツ。

志、堅し、且、望、遠し。（主 說 主 說）

○主語ト客語トハ、名詞（代名詞、數詞）ニテ成リ、說明語ハ、動詞、形容詞、助動詞ニテ成ル（共ニ、熟語ナルモアリ）

主語、客語、ノ修飾語ハ、連體法（動詞、形容詞、助動詞、ノ）ノ意ヲ成シ、說明語ノ修飾語ハ、副詞ノ意ヲ成ス。

〈中略〉

聯構文

聯構文。二文ヲ聯絡セシメテ、一文ニ構成スルヲ聯構文トイフ。然ルトキハ、上ナル文ノ說明語ニ、中止法ヲ用ヰ、或ハ、豆爾波ヲ添ヘテ、聯絡セシメ、文ヲ變ジテ句トス。三文以上ナルモ、然リ。

花、咲き、鳥、鳴く。（主 說 主 說）　志、堅く、望、遠し。（主 說 主 說）

水、清ければ、大魚、棲まず。（主 說 主 說）　春、過ぎて、夏、來たるらし。（主 說 主 說）

君、君たれども、臣、臣たらず。（主 說 主 說）　日、暮れかゝるに、宿るべき所、遠し。（主 說 主 說）

櫻散る、木の下風は、寒からで、空に知られぬ、雪ぞ、降りける。（修 主 說 修 主 說 主部）

○一個ノ主語ニ、數個ノ客語、說明語、アルアリ。數個ノ主語ニ、一個若シクハ、數個ノ客語、說明語、アルアリ。亦、聯構文ノ一體ニテ、別テハ、數個ノ文ヲ成ス。

重盛は、君に、忠を致し、父に、孝を竭せり。（主 客 說 客 說）

第一軍は、平壤を陷れて、九連城を取り、第二軍は、金州城を拔きて、旅順口を占めたり。（主 客 說 主 說 客 說 說）

忠、孝は、國體の精華なり。（主 主 客 說）

●東京の都は、面積、廣く、人口、多し。（例文B）（主① 主② 說 主③ 說）

我も、人も、歷史をも、地理をも、學びたり。（主 主 客 客 說）

〈中略〉

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読（国語科教育学・国語科内容学）

解剖　5

解剖。成文成句ヲ解キテ其組織ヲ講ズルヲ「文章ノ解剖」トス、コレ、前陳ノ構文諸法則ヲ、反覆シ會得セシムル用ナリ。先ヅ、文句中ノ單語ヲ、個々ニ解キテ、各語ノ種類、意義、用法、ヲ講シテ、他語トノ關係ニ及ブ、コレヲ「語脈ノ解剖」トス。次ニ、主部、客部、説明部、等ヲ分類シテ、其所屬ヲ講シ、終ニ、文體（聯構文、挿入文等）句體（倒置句、言掛等）ニ及ブ、コレヲ「文脈ノ解剖」トス。

○「年の内に、春は來にけり、一年を、去年とやいはむ、今年とやいはむ。」（古今、一）

- 年の内に
  - 年の：名詞、第一類互爾波、年ト内トヲ承接ス、
  - 内に：名詞、第一類互爾波、年の内トにけりトヲ承接ス、
- 春は：名詞、第二類互爾波、春トにけりトヲ承接ス、（主部）
- 來にけり：無對自動詞、加變、第五活用（に）ニ接スルニ因テ、牢過去ノ助動詞ノぬノ第五活用（けり）ニ接スルニ因テ、過去ノ助動詞、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法（但シ過去ノ意ナク念ヲ推シテイフモノ）
- 説明部

主語　（吾人）人代名詞、自稱、

客語　一年を：名詞、第一類互爾波、一年ト言はむトヲ承接ス、（客部）

客語　去年と：名詞、第一類互爾波、去年ト言はむトヲ承接ス、（客部）

説明語　言はむ：複對他動詞、波行四段活用、第四活用、不定法、未來ノ助動詞、第二活用、第二終止法、やノ結法、（説明部）

客語　今年と：名詞、第一類互爾波、今年ト言はむトヲ承接ス、（客部）

説明語　言はむ：複對他動詞、波行四段活用、第四活用、不定法、未來ノ助動詞、第二活用、第二終止法、やノ結法、（説明部）

此ノ歌ハ、二文ニテ成レリ、初ナルハ、主語、説明語、各、一個アリテ、全キ文ナリ、（内ニ、倒置句アリ、）末ナルハ、一個ノ主語ニ、二個ノ説明語アリテ、一頭、兩脚ノ聯構文ナリ、若シ、「吾人（主語）ト、一年を（客語）ト、ヲ各自ニ設ケバ、「吾人、一年を、去年とや言はむ。吾人、一年を、今年とや言はむ。」ノ二文ヲ成スベシ。

問1　この文章の著者名と、同じ著者が編纂した辞書の名称を答えなさい。

問2　【單語篇】で挙げられている八品詞と、現在中学・高校で教えられている国文法（学校文法）における品詞とを比較し、その相違点について説明しなさい。また、中学・高校で一般的に教えられている英文法の品詞との異同についても、知るところを述べなさい。

問3　傍線部Aの、「有對自動詞」「單對他動詞」「複對他動詞」について、現代語の例を挙げながら説明しなさい。

問4　この文章における「修飾語」と「客語」の違いを説明しなさい。また、現在中学・高校で教えられている国文法（学校文法）では、この両者にあたる成分がどのように扱われているかを説明するとともに、その是非についても論じなさい。

問5　例文Bは、三つの主語がある文として紹介されているが、「主」①～③は同じ次元に並ぶ主語と言えるだろうか。このようなタイプの文についてのその後の研究史を踏まえたうえで、助詞「は」「が」の用法と関連させて論じなさい。

問6　この文章の著者が提唱した日本語文法論の特徴はどのような点にあると思うか。日本語学史上の業績にも触れながら説明しなさい。

（以上）

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

三　古典文学Ⅰ（上代文学）

〔問題〕　後の〈資料〉は、真福寺本『古事記』中巻の一部である。これについて、次の問一～問四に答えなさい。

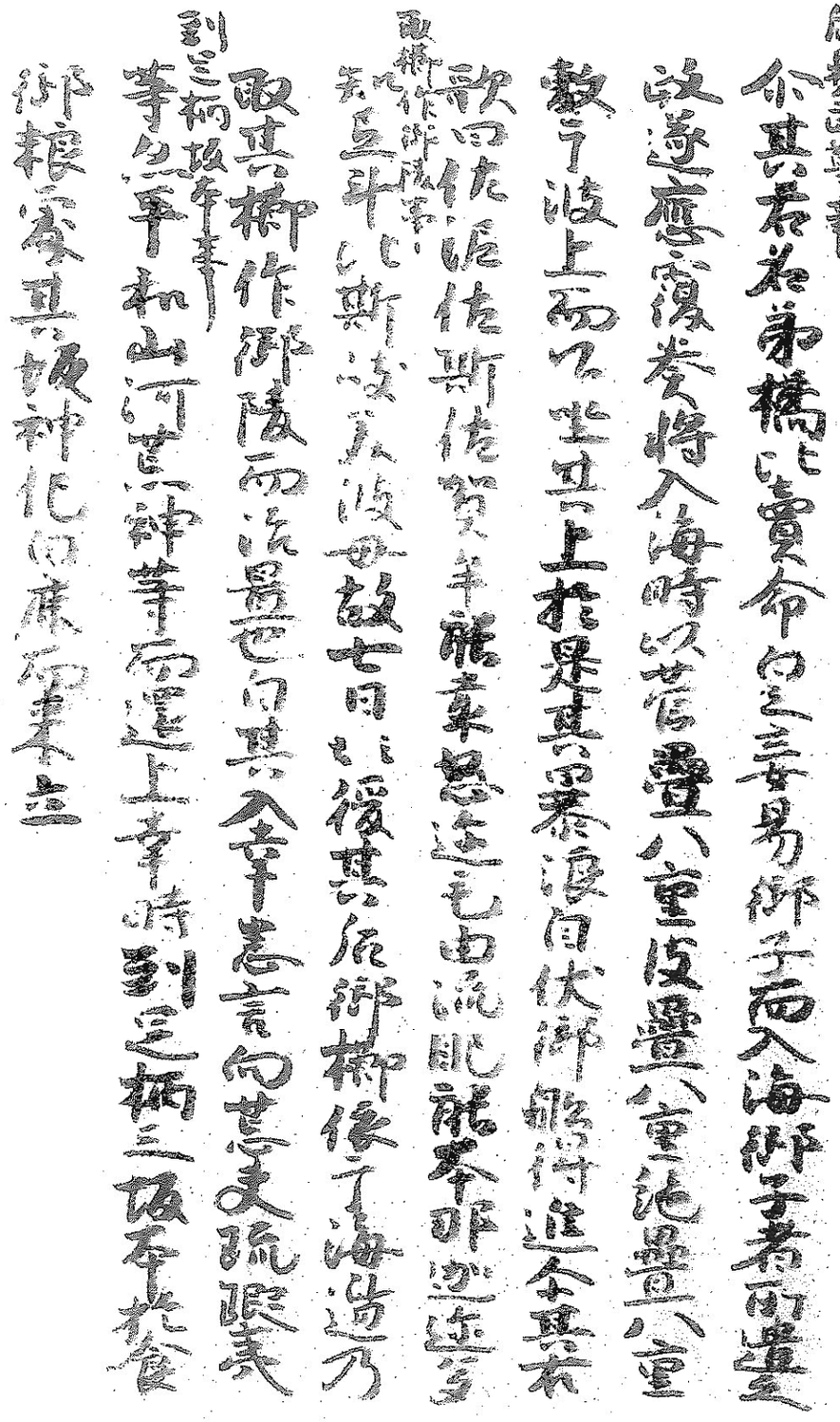
問一　全文を意味の通る漢字仮名交じりの書き下し文にしなさい（適宜句読点を施すこと）。時代や文体を考慮し、明らかな誤字・脱字・衍字等が認められる場合には適切な形に改めること。

問二　真福寺本『古事記』中巻の伝本上の特徴について説明しなさい。

問三　本文中に含まれる歌謡を文脈に則して解釈しなさい。

問四　本文中に含まれる歌謡にふれつつ、日本詩歌史上における記紀歌謡の位置について論述しなさい。

〈資料〉



二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

四　古典文学　Ⅱ（中古文学）

問一　次の影印を行数、字配りなどはそのままに翻刻せよ。

問二　この部分について、どのようなことが論じられているか、説明せよ。

問三　本文校訂について、研究者はどのような態度で臨むべきか、ご自身の研究領域に関わらせながら論述せよ。

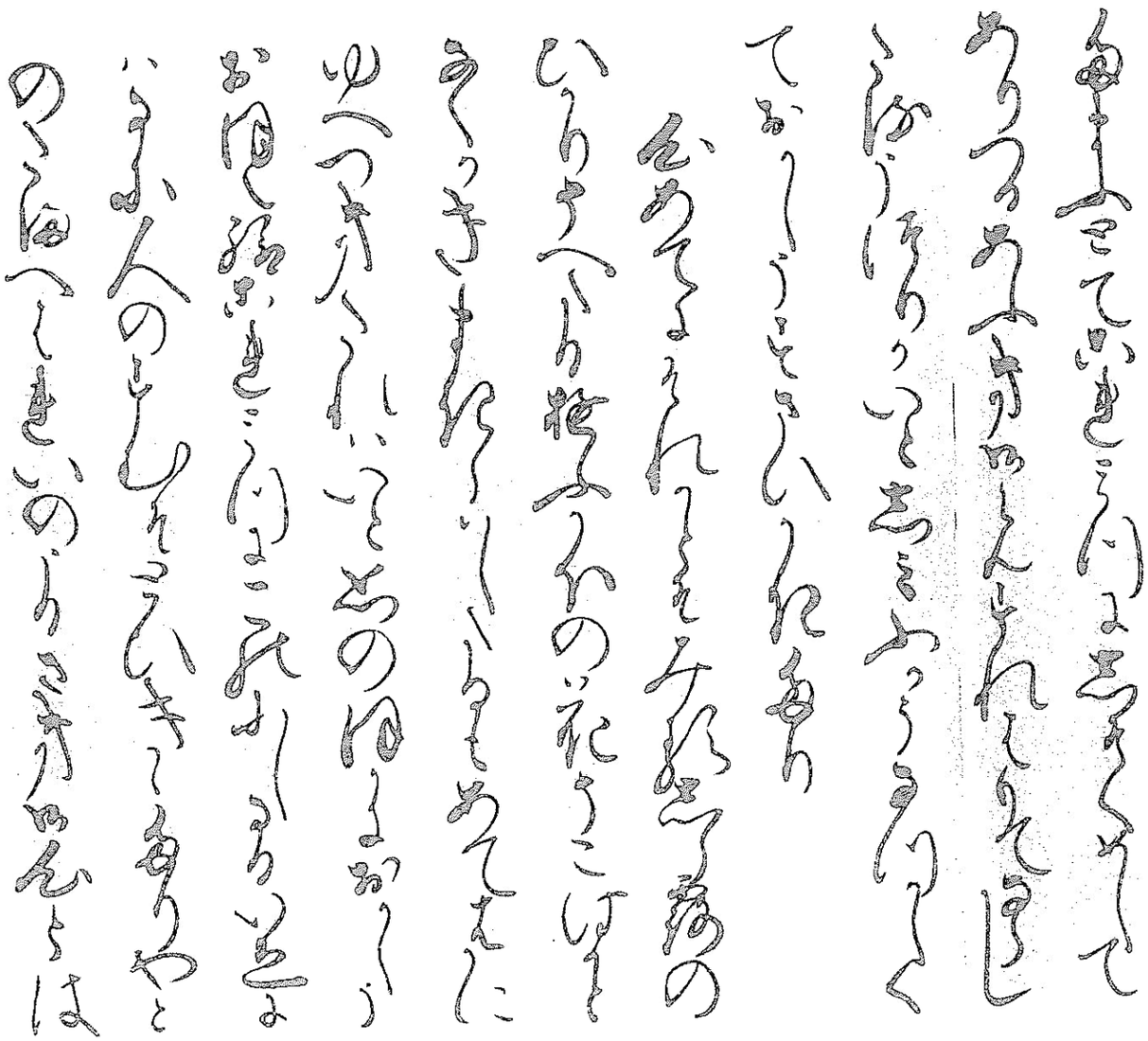
問四　次の中から一つ選び論述せよ。選択した番号を明記すること。

①源氏物語の伝本系統

②蜻蛉日記の文学史的意義

③斎宮・斎院と平安文学

【影印】



二〇一八年度

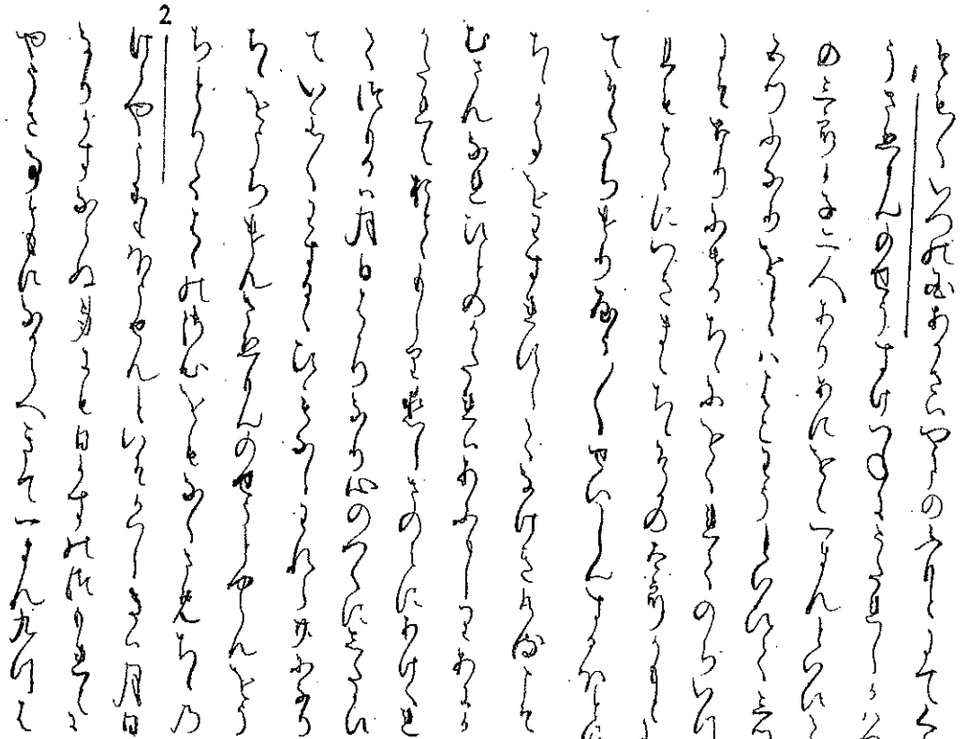
早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

五　古典文学Ⅲ（中世文学）

次の問題一、問題二のうちのいずれかを選択して、後の問いに答えなさい。

問題一　次の資料を読んで、後の問いに答えなさい。



問一　全文を行数・字配りはそのままに翻字しなさい。

問二　傍線部1・2を漢字に直しなさい。

問三　この資料の作品名を答え、その作品の内容、成立、諸本、受容などについて知るところを述べなさい。

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

問題二　次の資料を読んで、後の問いに答えなさい。

問一　全文を行数・字配りはそのままに翻字しなさい。

問二　これは『新後撰和歌集』の一部である。そのどの部分かを考え、巻名を書きなさい。
また、『新後撰和歌集』の撰者と成立について書きなさい。

問三　和歌六首のうち二首を選んで、それぞれ現代語訳した上で、解説しなさい。

問四　この歌群の配列意図について述べなさい。

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

六　古典文学Ⅳ　（近世文学）

一　次は、『西鶴置土産』に載る西鶴の辞世と肖像、並びに俳諧師の追善句である。これを読んで、あとの設問に答えよ。

（1）西鶴の詞書きを含んだ辞世を、原文通り翻字せよ。

（2）辞世の意味を解釈せよ。

（3）西鶴の俳諧活動について記せ。

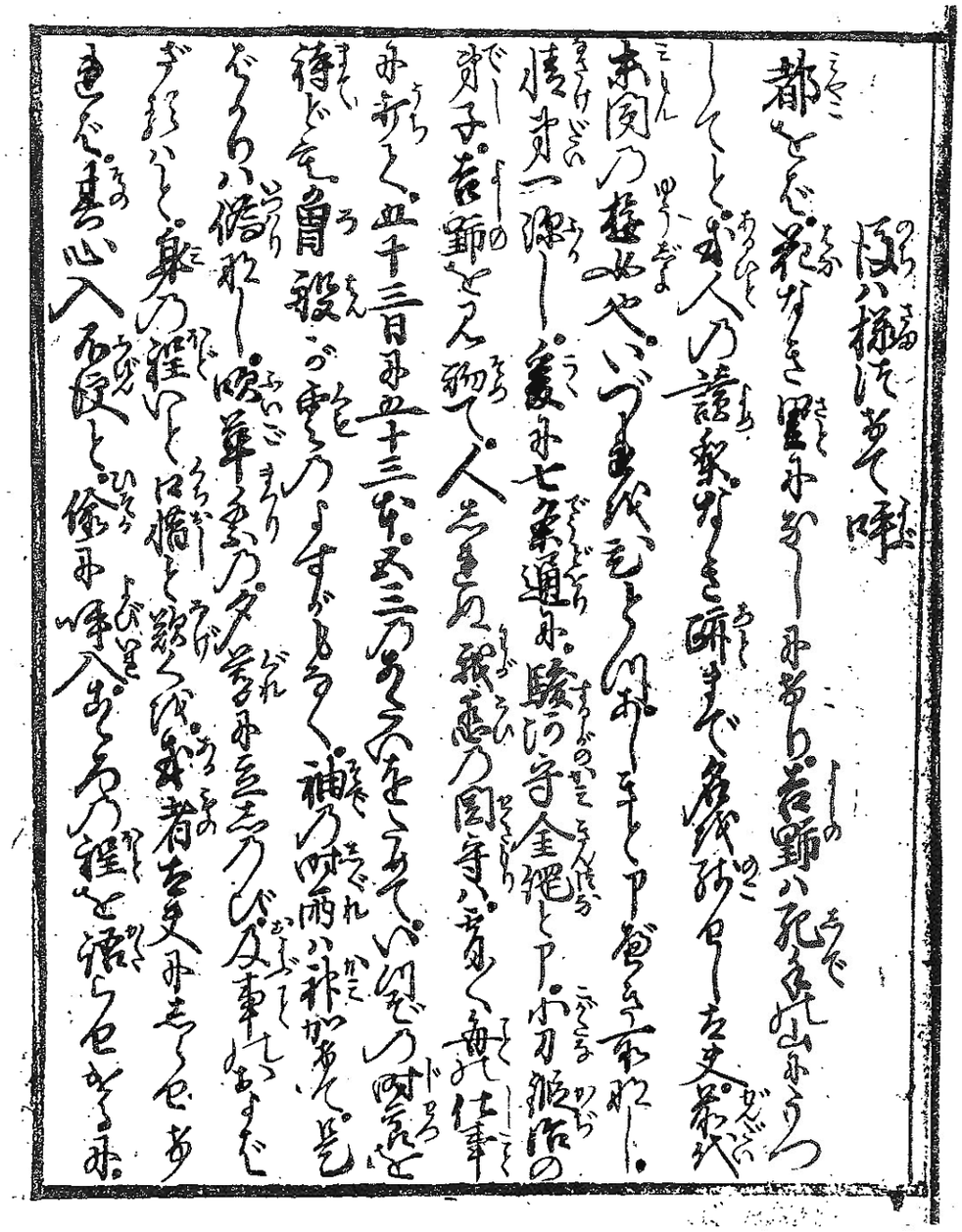
（次に続く）

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

二　次の文章は、『好色一代男』巻五の一「後は様つけて呼」の一節である。これを読んで、あとの設問に答えよ。



（1）この文章を原文通り翻字せよ。句読点は採点しないが、行移りは原文通りにすること。

（2）『好色一代男』の叙述にみられる俳諧的要素について、自由に記せ。

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

七　中国古典文学

問題一　次に示すのは、『太平広記』巻二百七十四「情感」に収載される「買粉児」である。よく読んで、設問に答えなさい。

〔A〕有人家甚富，止有一男，寵恣過常。游市，見一女子美麗，売胡粉。愛之，無由自達。乃託買粉，日往市，得粉便去。初無所言，積漸久，女深疑之。明日復来，問曰，君買此粉，将欲何施？　答曰，意相愛楽，不敢自達。然恒欲相見，故假此以観姿耳。女悵然有感，遂相許以私，尅以明夕。其夜，安寝堂屋，以俟女来。薄暮果到，男不勝其悦，把臂曰，宿願始伸于此！　歓踊遂死。女惶惧不知所以，固遁去，明還粉店。

〔B〕至食時，父母怪男不起，往視，已死矣。当就殯斂，発篋笥中，見百余裹胡粉，大小一積。其母曰，殺我児者，必此粉也。入市遍買胡粉，次此女，比之，手迹如先。遂執問女曰，何殺我児？　女聞嗚咽，具以実陳。父母不信，遂以訴官。女曰，妾豈復吝死！乞一臨尸尽哀。県令許焉。径往，撫之慟哭曰，不幸致此！　若死魂而霊，復何恨哉！男豁然更生，具説情状。遂為夫婦，子孫繁茂。（出『幽明録』）

〔設問一〕　〔A〕の部分を、書き下し文にするか、現代中国語の発音記号（ピンイン）で書くか、いずれかを選んで答えなさい。

〔設問二〕　〔B〕の部分を、口語訳しなさい。

〔設問三〕　この「買粉児」について、掲載書・典拠・テーマ等を含めて解説しなさい。日本の国語教材（現代文・古文・漢文）等との関わりからコメントを加えてもよい。

〔次ページに続く〕

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

問題二　次の詩は、北宋・蘇軾の「和子由澠池懐舊」という詩の本文（A）と注（B）である。これを読んで、設問に答えなさい。

A

人生到處知何似
應似飛鴻踏雪泥
泥上偶然留指爪
鴻飛那復計東西
老僧已死成新塔
壞壁無由見舊題
往日崎嶇還記否
路長人困蹇驢嘶

B

此兩句緣子由首篇序云、「昔與子瞻同侍編禮、皆宿縣中寺舍、題其老僧奉閑之壁」。而詩云、「舊宿僧房壁共題」。故先生和之云爾。

・子由……蘇軾の弟・蘇轍の字。　・子瞻……蘇軾の字。　・編禮……蘇軾兄弟の父・蘇洵。

〔設問一〕傍線部の四句「人生～東西」を、①書き下し文に改め、②和訳せよ。

〔設問二〕B文は、波線部の二句「老僧～舊題」に対する注である。Bの全文を和訳せよ。

〔設問三〕波線部の二句「老僧～舊題」は、蘇軾兄弟の思い出を踏まえつつ、当時との相違を詠じている。この二句を和訳せよ。

〔設問四〕二重線部「往日崎嶇」とは、どのようなものであったのだろうか。詩の本文、ならびに以下の蘇軾の自注を参考にしつつ説明せよ。

蘇軾自注……往歳馬死於二陵、騎驢至澠池。

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

八

近代文学

一、次の小説の表現上の特徴について論じなさい。

①この小説のタイトル、及びその文学史における位置づけについて、自身の考え方を述べなさい。

②この小説の表現上の特徴について、以下の問いに答えなさい。

新橋を渡る時、發車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の、煙つた空氣に包まれて聞えて來た。葉子は平氣でそれを聞いたが車夫は宙を飛んだ。而して車が、鶴屋といふ町の角の宿屋を曲つて、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駈けぬける時、停車場の入口の大戸を閉めようとする驛夫と爭ひながら、八分がた閉りかゝつた戸の所に突立つてこつちを見戍つてゐる青年の姿を見た。

「まあおそくなつて濟みませんでした事……まだ間に合ひますか知ら」

と葉子が云ひながら階段を昇ると、青年は粗末な麥稈帽子を一寸脱いで、默つたまゝ青い切符を渡した。

「おや何故一等になさらなかつたの。さうしないといけない譯があるから代へて下さいましな」

と云はうとしたけれども、火がつくばかりに驛夫がせき立てるので、葉子は默つたまゝ青年とならんで小刻みな足どりで、たつた一つだけ開いてゐる改札口へと急いだ。改札はこの二人の乘客を苦々しげに見やりながら、左手を延して待つてゐた。二人がてん〳〵に切符を出さうとする時、

「若奥樣、これをお忘れになりました」

と云ひながら、羽被（はつぴ）の紺の香ひの高くするさつきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を肩にかけたまゝ慌てたやうに追駈けて來て、オリーブ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡さうとした。

「早く〳〵、早くしないと出つちまひますよ」

改札が堪らなくなつて癇癪聲をふり立てた。

青年の前で「若奥樣」と呼ばれたのと、改札ががみ〳〵怒鳴り立てたので、針のやうに鋭い神經はすぐ彼女をあまのじやくにした。葉子は今まで急ぎ氣味であつた歩みをぴつたり止めてしまつて、落付いた顏付きで、車夫の方に向きなほつた。

「さう御苦勞よ。家に歸つたらね、今日は歸りが遲くなるかも知れませんから、お孃さんたちだけで校友會にいらつしやいつてさう云つておくれ。それから横濱の近江屋――西洋小間物屋の近江屋が來たら、今日こつちから出かけたからつて云ふやうにつてね」

車夫はきよと〳〵と改札と葉子とを片見交りに見やりながら、自分が汽車にでも乘りおくれるやうに慌てゝゐた。改札の顏は段々險しくなつて、あはや通路を閉めてしまはうとした時、葉子はする〳〵とその方に近よつて、

「どうも濟みませんでした事」

といつて切符をさし出しながら、改札の眼の先きで花が咲いたやうに微笑んで見せた。改札は馬鹿になつたやうな顏付きをしながら、それでもおめ〳〵と切符に孔を入れた。

プラットフォームでは、驛員も見送人も、立つてゐる限りの人々は二人の方に眼を向けてゐた。それを全く氣付きもしないやうな物腰で、葉子は親しげに青年と肩を比べて、しづ〳〵と歩きながら、車夫の屆けた包物の中には何があるか中てゝみろとか、横濱のやうに自分の心を牽く町はないとか、切符を一緒にしまつておいてくれろとか云つて、音樂者のやうにデリケートなその指先きで、わざとらしく幾度か青年の手に觸れる機會を求めた。列車の中からはある限りの顏が二人を見迎へ見送るので、青年が物慣れない處女のやうに羞かんで、而かも自分ながら自分を怒つてゐるのが葉子には面白く眺めやられた。

一番近い二等車の昇降口の所に立つてゐた車掌は右の手をポッケットに突込んで、靴の爪先きで待遠しさうに敷石を敲いてゐたが、葉子がデッキに足を踏み入れると、いきなり耳を劈くばかりに呼子を鳴らした。而して青年（青年は名を古藤といつた）が葉子に續いて飛び乘つた時には、機關車の應笛が前方で朝の町の賑やかなさゞめきを破つて響き渡つた。

二〇一八年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

科目名　資料解読　（国語科教育学・国語科内容学）

二、以下に示すのは国木田独歩「自然を写す文章」の全文である。当時の文学、文壇、思想、文化など様々な状況に触れながら、この文章の意義について説明しなさい。

自然を寫す文體はどんなのがよいかといふやうな事は、今まで一度も考へた事はない、又私は自然を寫すには文體はなんでも可からうと思つて居る。兎に角自分の一等書き易い文體で書けばそれでよからう。けれども一ツ考へて見なければならぬ事は、あまりに文章に上手な人、つまり多くの紀行文を讀み、大くの漢字を使用し得る人の弊として、文章に役せられて、却て自然を傷けて了うやうな事があるかも知れぬといふ事だ。自然を見て自然を寫すには、見たまゝ、見て感じたまゝを書かんければならぬ、見もし感じもしたその量だけを文字に顯はさんければならぬ、デクリーの問題である。この量を少しでも多くにかき、大きく書けば、それは嘘を書いたのであつて、眞の叙景文でもなければ、詩としても價値はない。ところが餘りに文章が上手な人、つまり文章を作る文字や形容詞などの澤山ある人は、遂にそのデクリーを超過して了つたものを書く、信濃の山水の事を書いても、名詞や所の名などを引つこぬいたら蜀の山道を書いたものやら、一向區別がつかなくなるといふやうな事が起つて來る。私の叙景文などは文章としては四離滅裂なものでせう。私は文章を上手に書かうとは思はん、自然を見て、感じたところをなるべく忠實に、下手な文章を以て顯はして行く、さうして人に、自分の感じたところを、感じさしさへすれば、それで成功したものとおもつて居る。『武藏野』なども文章はまづいか知らぬが、感じた事をそのまゝ直叙したといふ事は事實である。あれは武藏野に居て、常に頭の中に自然が充ち滿ちて、自分で消しにかゝつても消されぬ程に、明かに寫つた自然をそのまゝ叙したのである。自然より感得したところそのまゝであるから一面から言へば、自分の心をうちつけに自然に托して書いたものとも言へる、自然をかりて、自然より享けた感じを書いた叙情詩である。

自然を見て、それを寫すのに、こて〳〵と文飾を施して、嘘をかくほど、いやなものは無いと私は思つて居る。論文などは、いくら誇張したからと言つて、自分が思つて居る事を論じて行くのだから、さして誇張らしき感も起つて來ぬが、又來たところで、お終ひは、可か否の二つで、いくら誇張して書いても、可であるべきものが否であつたり、否であるべきものが可になるべき譯がない。けれど叙景文では机の上で、本當に見もせずに塗りまはすのだからサツパリ生氣のない、厭味の多い嘘をかく事になる。私の書いた『空知川のほとり』といふのでも、烏水君は大變褒めて呉れましたが、あれにしたところで、私は自然を精細に描寫して は無い、たゞ自然の感じた、眞に心のそこへ自然が泌み渡つた中心點より外書いてない。もつと精細に、たゞ見た丈を叙した分には、幾かゝへもある櫟の大木に、つたが這ひかゝつて居つたり、引き倒された落葉が降り埋めて居たりするやうな景色が、いくらも有つたらうけれども私は、心の中にあふれきれるほど感じたところしか筆にあらはさぬ。

自然といふものは決して精細に、寫せるものではあるまいとおもふ。或る主要なる一部分を取つて、それを描寫すれば足りる、あとは讀む人の聯想にまかせるといふのがよいとおもふ。又自然を寫すのに、こういふ風であるから、實に壯嚴であつたとか、こういふ景色であるから、美しいとかいふて斷はることはいらぬとおもふ。こういふ風である、こういふ景色であるとさへ言へば宜しい。その先を讀者の方で、なるほどそれだから壯嚴であらう、それだから美しかつたらうと思はせるやうにしなければならぬ。二二ンが四まで言はなくとも、『二二ン』だけで、あとの四は讀者の判斷にまかせんければいかん。

自然は決して机の上で寫せるものでなければ、又遊んで居て自然の研究は出來るものではない、少なくとも、人の目前自然が現はれるやうに書くには一見一瞥ではいかぬ、私の叙景文は、それだから少ないです、よほど何邊も頭へ泌み込むか、或は一邊でも可いが、頭の中へしつかり印象されたものでなければ、かいなでの紀行などを書いた事はありません。

自然を研究し、又眞の叙景文を書かうとおもふたら、大に勉強せんければなりません、少々遠くても不便でも、行き得るかぎりは散策し、朝霜が降つて居るときでも、起き惡くいところを無理に起きて、到るところを一生懸命でさぐつてあるかなければ、眞の自然の惠みには浴せられません。然し倦まず怠らず勉強して研究して居る内には、自然は、日に日に新たなるものを示して、我々を啓發して呉れます。

（明治三十九年十一月一日「新聲」第十五編第五號）